2004-00654A

厚生労働科学研究費補助金

エイズ対策研究事業

同性愛者等のHIV感染リスク要因に基づく予防介入プログラムの開発及び効果に関する研究

平成１６年度　総括・分担研究報告書

主任研究者　大石　敏寛

特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会

平成17（2005）年３月

目　　次

Ⅰ．総括研究報告書

同性愛者等のHIV感染リスク要因に基づく
予防介入プログラムの開発及び効果に関する研究 …… 1
研究結果（啓発手法モデルの開発） …… 3
（効果評価指標と手法の開発） …… 9
考　　察（啓発手法モデルの開発） …… 11
（効果評価指標と手法の開発） …… 12
結　　論 …… 13

Ⅱ．分担研究報告書

研究１：啓発手法モデルの開発に関する研究 …… 17
研究結果
本研究班の啓発手法開発の概要 …… 20
小グループレベル「LIFE GUARD」の本開発過程 …… 20
マンガ・ビジュアルの教育資材開発 …… 25
小グループレベル「LIFE GUARD」の実施 …… 27
新規開催店舗開拓プロセス …… 28
小グループレベル「LIFE GUARD」の効果評価 …… 30
個人レベル「STD情報ライン」の実施 …… 34
個人レベル「STD情報ページ」の実施 …… 37
コミュニティレベル「マンガやイメージ・フォトを活用した配布資材」 …… 39
コミュニティレベル「HIVと抗体検査サポート冊子」 …… 40
各地域の特徴をふまえた介入 …… 41
各地への普及のための取り組み・行政との連携事例 …… 43
「介入の集団およびコミュニティへの普及」モデル …… 45
考　　察 …… 50
結　　論 …… 51

研究２：効果指標およびそのための手法の開発に関する研究…… ５５
研究結果
効果評価の文献・事例研究 …… ５９
効果評価手法の精緻化に向けた改良 …… ６３
効果評価手法の汎用化に向けた改良（フォロー・テスト回答システムほか） ６５
プログラム評価「LIFE GUARD」 …… ６７
プログラム評価「STD 情報ライン」 …… ７１
プログラム評価「STD 情報ページ」 …… ７５
プログラム評価（コミュニティレベル） …… ８０
考　察 …… ８１
結　論 …… ８２

参考資料１：小グループレベル「LIFE GUARD」進行シナリオ …… ８３
参考資料２：小グループレベル「LIFE GUARD」テクニック集 …… ９５
参考資料３：小グループレベル「LIFE GUARD」質問表（プレ・テスト） …… ９８
参考資料４：小グループレベル「LIFE GUARD」質問表（ポスト・テスト） ……１００
参考資料５：小グループレベル「LIFE GUARD」質問表（フォロー・テスト） ……１０２
参考資料６：個人レベル「STD 情報ページ」 ……１０４

Ⅲ．研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表……１０７

Ⅰ．総括研究報告書

同性愛者等のHIV感染リスク要因に基づく
予防介入プログラムの開発及び効果に関する研究

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）
総括研究報告書

研 究 課 題：同性愛者等の HIV 感染リスク要因に基づく予防介入プログラムの開発及び効果に関する研究
課 題 番 号：Ｈ－１５－エイズ－０１４
主任研究者：大石　敏寛（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）
分担研究者：河口　和也（広島修道大学）

研究要旨

男性同性間性的接触での HIV 感染が増加する中、同性愛者を対象とした施策を実施できる自治体が増加するよう、啓発手法の方法論を幅広く、複数の選択肢を提示することが必要であると考えている。

本年度は、①効果のあがる啓発手法を開発すること、特にワークショップ型啓発手法を完成させること、②啓発介入効果が介入対象の個人から集団、社会へと拡大していく普及・波及について検討すること、③効果があるかどうかを判断するための効果評価手法の精緻化・汎用化を目指すこと、を目的として研究が行われた。研究は、「啓発手法モデルの開発に関する研究（研究１）」と「効果指標およびそのための手法に関する研究（研究２）」から構成された。本年度は３年計画の２年目として、以下の成果を得た。

同性愛者に対する予防介入プログラムを、３つの領域に準拠して開発し、介入実践が行われた。小グループレベル「**LIFE GUARD**」、個人レベル「**STD 情報ライン**」「**STD 情報ページ**」、コミュニティレベル「**情報パンフレット**」「**HIV と抗体検査サポート冊子**」「**セイファーセックス・グッズ**」である。また、効果があるかどうかを判断するための効果評価手法について検討され、個々の手法に応じた効果評価が行われた。

また本年度は、主に、小グループレベルについて、15 年度に予備介入を実施したバー介入のワークショップ型啓発手法が、予備介入時の課題を修正するなど改良の上、本開発された。効果評価によって、ほぼ全ての指標における介入の効果と、効果の１ヶ月後の持続が確認された。このほかでは、以下のような成果が挙げられる。

① 国内外の事例研究により、包括的なプログラム評価の枠組みを踏まえ啓発介入プログラムに対照した効果評価手法の整理と課題が確認されたこと
② ３レベルでの HIV 予防啓発手法が実施され、効果評価の難しい個人レベル、コミュニティレベルにおいても、効果評価に向けた挑戦を開始したこと
③ 効果評価の精緻化に向けた指標の見直しと、汎用化に向け１ヶ月後追跡調査の回答システムが構築されたこと

また、啓発介入の考え方として、従来の単体の手法に完結する啓発介入を活用して、さらに個人への介入が集団、コミュニティへと普及・波及していく新たな枠組み（介入の集団およびコミュニティへの普及モデル）を検証し始めることができた。

A. 研究目的

平成 15 年度の厚生労働省エイズ動向委員会の「2003（平成 15）年エイズ発生動向年報」によれば、平成 15 年に報告された男性同性間性的接触の占める割合は、HIV 感染者で 55.6%、エイズ患者で 28.6%と、高い割合を占め、増加傾向にある。

さらに、従来指摘されてきた大都市部での感染増加以外の、小・中規模都市においても感染は増加傾向にある。ところが、同性愛者を対象とした施策を実施している自治体は 1 割に満たない。（大石ら，2001）このように同性間感染は増加しているにも関わらず、依然として介入未実施の地域が多いことに対し、本研究班は、国や自治体が同性間感染予防対策として採用する方法論の偏りと不足が課題であると考えている。また、どのような啓発手法の採用が効果的であるかといった判断の根拠、介入現場と連携する行政が、プログラムの効果をはかる指標についての理解を十分もっていないことも関係していると考えられる。

そこで、本研究では、複数の有効な（効果が評価されている）啓発手法の開発を通じて、介入未実施の地域を含めた全国各地に同性間の予防啓発施策を実施し普及させていくことを目標とする。そのため、本研究では、以下の 4 点を研究目的とする。

①どのような規模、特徴の自治体にも採用可能な 3 レベルでの啓発手法を開発実施し、有効な手法の開発と各地への普及にあたっての資料を得ること
②前年度予備介入を実施したワークショップ型の啓発手法を完成させること
③予防プログラムをより正確に評価し（精緻化）、一般に普及することが可能で実用的（汎用化）な効果手法および評価指標を明らかにすること
④予防啓発の手法単体での介入効果に限定せず、介入効果が個人から集団、社会へと拡大していく普及・波及について明らかにすること

B. 研究方法

1. 研究の枠組

効果評価が確認された啓発手法の開発および効果評価手法と指標の検討を効果的に実施するため、本研究は 2 つの分担研究から構成される。（表1）

表1 分担研究の枠組み

分担	論題	目的
研究1	啓発手法モデルの開発に関する研究	①②④に対応
研究2	効果指標およびそのための手法に関する研究	①③に対応

本研究班では、予防啓発手法について、欧米の定型（Kalichman, 1998 ほか）に沿って、介入対象別に 3 レベルでの開発を実施、さらに新たに「普及」の観点を加えた取り組みをしている。本年度の研究方法は以下の通りである。

2. 啓発手法モデルの開発に関する研究（研究1）

(1) 小グループレベルの啓発手法の開発

15 年度に予備介入を行ったワークショップ型啓発手法「LIFE GUARD」について、本開発を目指す。そのため、①本開発過程の検証（プログラムの量的・質的な改良）と全国各地での実施、②プログラムの効果評価によるプログラム開発の成果と課題の確認、という 2 段階の研究を行った。

(2) 個人レベルおよびコミュニティレベルの啓発手法開発

フリーダイヤル型電話相談を用いた介入と、インターネットを活用した介入の 2 種類の運用を行う。また、「リスク・アセスメント調査」に基づく啓発手法として試行し、実践に伴う記録データを蓄積、整理、集計し、今後の啓発手法開発に活用する。

(3) 各地へのプログラムの普及の検討

以上のように開発、検討されたプログラムを各地に普及する目標から、①地域の特徴をふまえた介入、②各地への普及のための取り組み、について検討を加える。地域の特徴をふまえた介入については、これまでの地域別のプログラム実践事例を確認整理し、質問票調査により、地域間の比較を行い、今後のプログラムに活用するべき観点を整理、考察する。

(4)予防啓発介入の普及モデルの検証

小グループレベルでの啓発介入が、介入対象の個人にとどまらず他者に情報などが伝播していく事例に着目し、ロジャーズ（1983）の普及理論についての文献研究および普及学の事例研究を行う。また同性愛者等を対象としたプログラムに、普及理論の適応について検討を行う。

3. 効果指標およびそのための手法に関する研究（研究2）

(1)効果評価の文献・事例研究

HIV 予防プログラムの評価について、Rehleらの "Evaluating Programs for HIV/AIDS Prevention and Care in Developing Countries"（2004）など欧米の先行研究をもとに、文献研究を行う。また、国内の近年のHIV 予防プログラムについて、評価を行っている実践例を対象として事例研究を行い、現状の課題等を明らかにする。

(2)効果評価手法の精緻化と汎用化に向けた研究

小グループレベルの啓発プログラム「LIFE GUARD」に焦点化し、プログラムの開発および各地への普及と併せて、効果評価の普及へ向け検討する。特に、精緻化の観点から質問票調査の調査項目の見直しを複数の観点から行う。また、汎用化の観点から、1ヶ月後の追跡調査のためのシステムを新たに構築し、実用上の課題や問題点を整理、考察する。

(3)研究1で開発された各レベルのプログラム評価の実施

小グループ、個人、コミュニティの各レベルごとに開発された啓発手法に対応して、現時点で最適かつ現実的に採用できると思われる手法によって、プログラムの評価を行い、考察する。特に、小グループレベルでは、介入前・後・1ヶ月後の追跡を含む質問票調査によって、介入の効果評価を行う。また、従来啓発手法の特徴として効果評価に限界があると考えられてきた個人、コミュニティレベルでは、現時点で採用し得る手法を検討し、効果評価を試行し、参考資料を得る。

さらに、より実用的な効果評価の活用方法を検討するために、新たに複数の対象層（特性別）ごとの効果評価も試行する。

(倫理面への配慮)

「疫学研究に関する倫理指針」を遵守する。調査対象者には調査の主旨について十分な説明と同意を得てインタビュー、質問票調査を行い、研究に対し異議がある場合には、拒否できる機会を保障する。また、個人が不利益を受けることのないよう、プライバシーには特段の配慮を行う。さらに、本研究事業全体を通して、当事者に対して不適切な用語（「性倒錯者」「ホモ」「おかま」等）は使用しないことを徹底する。

C. 研究結果

【啓発手法モデルの開発に関する研究（研究1）】

1. 啓発手法開発の基礎的枠組

HIV 予防啓発プログラムの定型に沿って、小グループレベル、個人レベル、コミュニティレベルについて啓発手法を試験的に開発・実施をしてきた。また、開発にあたっては、リスク・アセスメント調査により明らかとなった、「リスク要因」（リスク行動に対して相関の高い要因、p. 21 参照）を反映している。（「平成 13 年度厚生労働省エイズ対策研究事業　研究報告書，2002」）これまでに開発してきた啓発手法は表2の通りである。

表2　3レベル毎の啓発手法

類型	本研究班の啓発手法
小グループレベル	ワークショップ型啓発手法「LIFE GUARD」 ・公共施設実施版は本開発（2002）
個人レベル	フリーダイヤル型電話相談の介入「STD 情報ライン」
	インターネットを活用した介入「STD 情報ページ」
コミュニティレベル	マンガやイメージ・フォトを活用した配布資材アウトリーチ テーマに焦点化した配布資材 グッズを活用したパブリシティキャンペーン

2. バー介入ワークショップ型啓発手法の本開発（小グループレベル）

(1)プログラムの本開発過程＝プログラムの改良

本年度の研究では、最も各地で実施可能性が高く、かつ効果評価を伴う手法であることから、小グループレベルの手法の本開発を目指した。

改良にあたっては、①15 年度の予備介入時の課題修正、②質的改良―リスク要因の反映強化、③質的改良―啓発方法の見直しを行った。特に②では、予備介入時よりも、介入内容にリスク要因を計 14 回取り扱い(前年度比 40%増)、増強した介入を実施したほか、③では最もリスク行動との相関の高かった「主張スキル」の扱いを増強した。

また、このほか方法論の改良として、①マンガ・ビジュアルを活用した教材の活用、②配布資材(「セイファーセックスのテクニック集」「HIV 抗体検査資料集」)の作成を行った。

(2)ワークショップ型啓発「LIFE GUARD」の実施と効果評価

以上の改良を経たプログラムを本介入として実施し、その介入効果について評価を行った。

①プログラム「LIFE GUARD」の実施(本介入)

本年度は新規開拓のバーを含め、計 16 会場にて実施された。参加人数は、合計 369 名であった。参加者は年々増加し、過去最多の参加者であった。(表3) また、プログラムの普及という観点から新規に9ヶ所の店舗を開拓し、介入実施することができた。

表3 「LIFE GUARD」の実施状況

日付	地域	会場	人数
11/20 土	横浜●	1or8	18
11/21 日	川越●	BARI2	20
11/27 土	高松●	Lagoon	18
12/05 日	東京	EZRA	28
12/11 土	札幌●	ID&Hearty@Café	16
12/12 日	札幌●	Nostalgie	17
12/18 土	松山	BAR SEEK	24
12/19 日	松山	oBsession	11
12/25 祝	浦和	Dolphin	31
01/08 土	神戸●	Salute	27
01/09 日	松山	TUG	12
01/15 土	東京	[keivi!]	26
01/16 祝	東京●	Town House Tokyo	41
01/22 土	札幌●	のん・すとっぷ	19
01/30 日	東京●	breeze	24
02/05 日	川崎	川崎タワーリバーク	37
合計			369

※地域欄の●は新規開拓店舗

実施にあたっては、プログラムの普及へ向けて、①新規開催店舗の開拓プロセスの記録をもとに整理分析し、「紹介型」と「独自開拓型」に類型化された。また、②より多様な参加者への介入を果たすためには、各方面への広報を行った。

②「LIFE GUARD」の効果評価

プログラムの参加者、全 16 ケ所、369 名を対象としてプログラムの効果評価を実施した。介入効果は、介入前(プレ・テスト)、介入直後(ポスト・テスト)、1ヶ月後(フォロー・テスト)の質問票調査での回答の変化によって測定された。評価の指標は6つ設けられ、①感染に関する知識、②リスク行動に関係するリスク要因(「魅力・快感」「行動変容意図」「コンドーム抵抗感」)、③リスク行動を回避するうえで最も相関の高い「主張スキル」、④「自己効力感」、⑤コンドーム携帯率、⑥リスク行動の減少である。

回答の変化は、プレ・テストとポスト(またはフォロー)・テストにおける回答について、平均の差の検定を、ノンパラメトリック分散分析を用いて解析した。なお、解析には SPSS11.5J を使用した。その結果を次ページ表4に示す。

その結果、①感染知識、②リスク要因(「魅力・快感」「行動変容意図」「コンドーム抵抗感」)、③「主張スキル」、④「自己効力感」、⑤「性行動」において、介入前後での有意な差があることが確認された。感染行為知識では、一部有意な差がみられないものがあった。

さらに、今年度は、前年度の試験開発時点での課題をふまえた改良と、小集団とワークショップ形式の利点を最大限活かすための改良を行い、リスク要因(主張スキル、魅力・快感、自己効力感、コンドーム抵抗感、性行動)の取扱量を増強した。その結果、改良ポイントであったリスク要因(主張スキル、魅力・快感、自己効力感、コンドーム抵抗感、性行動)、でも有意な傾向、効果が確認できている(グラフ1)。前年度の試験開発されたプログラムにおける予備介入時の結果と比較しても、昨年は確認できていなかった有意差が、本年度は有意な結果を導くことに成功し、より予防介入効果の認められる手法として開発することができた。

表4 ワークショップ型プログラム「LIFE GUARD」の効果評価

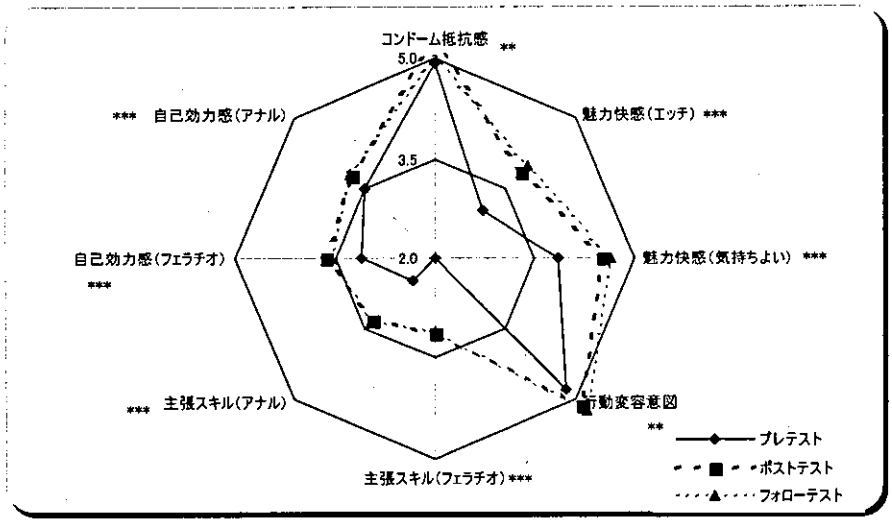
領域	項目	プレ(n=286)		ポスト(n=271)		フォロー(n=134)	
		n	平均	n	平均	n	平均
感染体液知識	血液	286	0.95	271	0.99**	134	0.99*
	汗	286	0.97	271	1.00*	134	0.99
	膣分泌液	286	0.73	271	0.97***	134	0.98***
	だ液	286	0.82	271	0.97***	134	0.94***
	精液	286	0.95	271	0.99**	134	0.99*
	涙	286	0.97	271	1.00**	134	1.00*
	先走り液	286	0.79	271	0.97**	134	0.99**
	感染体液知識の小計	286	6.17	271	6.89***	134	6.87***
感染身体部位知識	肛門	286	0.96	271	0.99*	134	0.99†
	へそ	286	0.96	271	1.00**	134	1.00**
	口の中	286	0.79	271	0.92***	134	0.90**
	亀頭	286	0.63	271	0.91***	134	0.84***
	尿道口	286	0.80	271	0.96***	134	0.96***
	感染身体部位知識の小計	286	4.14	271	4.77***	134	4.69***
感染行為知識	ディープキス	286	0.83	271	0.99***	134	0.95***
	コンドームなしでフェラチオする(口内射精なし)	286	0.78	271	0.90***	134	0.90**
	コンドームなしでフェラチオされる	286	0.59	271	0.69*	134	0.72*
	コンドームなしでアナルセックスされる	286	0.97	271	0.98	134	1.00†
	コンドームなしでアナルセックスする	286	0.92	271	0.98**	134	0.95
	感染行為知識の小計	286	4.09	270	4.52***	134	4.51***
	感染知識の合計	286	14.40	270	16.19***	134	16.07***
リスク要因	コンドーム抵抗感	285	4.93	271	5.28**	134	5.03
	セイファーセックスの魅力・快感(エッチに感じる)	285	3.02	271	3.84***	134	3.97***
	セイファーセックスの魅力・快感(気持ちよい)	284	3.86	267	4.52***	134	4.65***
	行動変容意図(セイファーセックスを試したい)	283	4.79	271	5.13**	134	5.25***
	主張スキル(オーラルセックスのリスク回避)	279	2.00	271	3.13***	134	3.11***
	主張スキル(アナルセックスのリスク回避)	281	2.48	271	3.31***	134	3.37***
	自己効力感(オーラルセックス)	282	3.10	271	3.63***	134	3.57***
	自己効力感(アナルセックス)	282	3.49	270	3.78***	134	3.81***
性行動	フェラチオをされた(口内射精あり)	263	1.79			80	1.58*
	フェラチオをした(口内射精あり)	265	1.95			80	1.53***
	コンドームなしでアナルセックスした	189	1.71			45	1.56†
	コンドームなしでアナルセックスされた	168	1.82			44	1.52*

1)「知識」は、正答=1、誤答=0とした。 *** p<.001, ** p<.01, * p<.05, † p<.10

2)「コンドーム抵抗感」「SSの魅力・快感」「行動変容意図」は、6点式リカートスケールを用いた。

3)「主張スキル」「自己効力感」「性行動」は4点式リカートスケールを用いた。

グラフ1 リスク要因の介入効果



※*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, † p<.10
※項目脇のマークはプレ・ポストの差の有意差を表す

3. 個人レベルの啓発手法

フリーダイヤル型電話相談を用いた介入「STD 情報ライン」とインターネットを活用した介入「STD 情報ページ」の２種類を、「リスク要因」をもとにした啓発介入領域を設定し、試験開発・実施した。(表5)

表5 個人レベルの介入実施状況

種類	開発の特徴	介入状況
「情報パンフレット」 (アナルセックス重点版と オーラルセックス重点版)	①性行為の種類別の開発 ②従来からのマンガ活用の効果に加え、イメージ・フォトの採用 ③A5サイズ×横2枚の変形サイズ採用	計 20,000 枚が作成され、全国の275ヶ所(バーを中心に)で配布
「HIV と抗体検査サポート」冊子	迅速検査の導入機関の増加にあたり、「検査」に関する情報を整理し、知識の伝達や教育を目的として作成された	「LIFE GUARD」を実施したバー15ヶ所での予備介入 約 400 枚配布
セイファーセックス・グッズ ・携帯電話のストラップ ・シール ・マグカップ	コンドームへの親近感とセイファーセックスへの意識喚起を目的に、日常使用頻度が高く、目にする頻度の高いグッズを配布し、日常的に予防行動へのメッセージを伝達	・ストラップ 1000 本 ・シール 1000 枚 ・マグカップ 100 個 以上を配布

4. コミュニティレベルの啓発手法

本年度は、①マンガやイメージ・フォトを活用した配布資材**「情報パンフレット」**、②**「HIV と抗体検査サポート」**冊子、③**「セイファーセックス・グッズ」**の開発、介入実施が行われた。開発にあたっての特徴、介入状況は以下の通りである。（表6）

なお、コミュニティレベルの介入の効果についても方法論的限界があるが、「情報パンフレット」についてのみ効果評価を行った結果、未読群に対して、既読群の方が「知識」に関して有意な差が認められた。

表6 コミュニティレベルの啓発手法の特徴と介入状況

	「STD 情報ライン」	「STD 情報ページ」
実施状況	週 2 日月曜日と金曜日、1 日あたり6時間（12 時～14 時、20 時～24 時）	毎日 24 時間運用
介入対象（2004 年4月～12 月）	261 件	1 日 500～600 件（同時期アンケート協力者 1559 名）
属性	男性 93.1%（N=243）、女性 1.9%（N=5）など	男性 79.3%（N=1237）、女性 7.4%（N=116）など
性的指向	同性愛 85.4%（N=223）、異性愛 6.5%（N=17）など	同性愛 42.3%（N=666）、両性愛 28.9%（N=450）、異性愛 13.3%（N=207）など
年齢	20～24 歳が 19.4%（N=50）、25～29 歳が 16.7%（N=43）など	10 代が 26.8%（N=371）、20～24 歳が 23.7%（N=328）など
居住地域	東京都 29.2%（N=76）、神奈川県 10.8%（N=28）など	東京都 17.1%（N=238）、兵庫県 8.3%（N=115）など
サービスへの希望（相談内容、利用した動機）	「治療・検査」52.9%（N=138）、感染不安な「行為」46.7%（MA）	

5. 各地へのプログラム普及の検討

本研究班では、以上の各レベルごとの啓発手法開発と同時に、各地域への普及を目指した研究として、ほかに①各地域の特徴をふまえた介入、②各地への普及のための取り組みを行った。

本年度は、①に関して、ワークショップ型プログラム「LIFE GUARD」について、地域間差と特徴を把握し記録を行った。関東と北海道、四国の間で比較したが、いくつかの知識とリスク要因において以外にあまり大きな差は確認されなかった。

さらに、②については、同性間の個別施策層対策の実施にあたり、地方自治体のニーズなどを整理し、本研究班が行ってきた行政との連携事例について記録、整理を行った。

6. 予防啓発介入の普及モデルの検証

(1)「介入の集団およびコミュニティへの普及」モデル化と普及理論適用の調査

さらに本年度は、新たに「集団およびコミュニティへの普及モデル」に基づく啓発手法の開発について検討した。まず、「コミュニティへの予防の知識・行動変容の普及のなされ方は、同じ仲間である同性愛者同士のコミュニケーションによって、より実践的な形で周囲規範として成立していくような過程（バーの常連がそのほかのハッテン場などに出向き、セイファーセックスの実践をおこない、影響をあたえていくなど）があること」に着目した。それは、予防の知識・リスク行動の変容を採用した個人（＝小グループレベルの啓発参加者）が、さまざまなフィールドにおいて、新たな価値基準の実践者として影響を与えていく可能性がある、ということである。このような小グループレベルの啓発を通し、同性愛者のコミュニティのなかに存在する経験則をもとに、同性愛者コミュニティにおける予防啓発の効果について、伝播モデルを試作した（図1）。

さらに、このモデルは、一つのレベルでの介入効果がその対象となった個人に止まらず、他者に情報や経験が伝達されていくという同性愛者等の行動についての観察と、ロジャーズ（1983）による「イノベーション普及理論」に基づくものである。そして、この試案はロジャーズの「オピニオン・リーダーとフォロワーの分類」に小グループレベルの啓発に参加する者が該当するかどうかを、具体的に検証するものである。

(2)普及理論の適用についての予備調査

前述のモデル化の妥当性について、ロジャーズの普及理論をもとに検証し、予備調査を行った。その結果は以下の表7の通りである。

図1 「介入の集団およびコミュニティへの普及」モデル

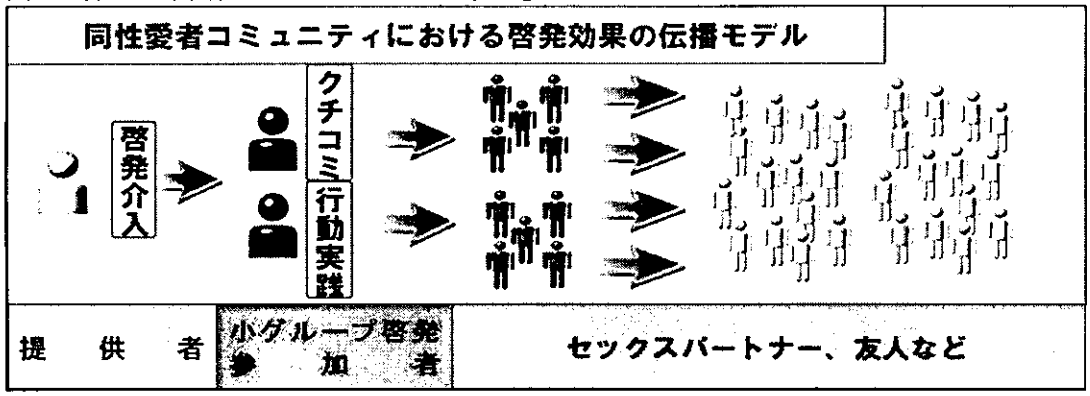


表7　普及理論適用についての予備調査結果

予備調査名と概要	結果
プログラム参加者の意識採用度調査 ・プログラム参加者のイノベーション採用過程の調査。個人の意思決定プロセスの条件を満たしているかどうかについて測定	①知識段階、②態度段階、③決定段階いずれにおいても、高い水準で、知識や行動意図などの、新たな行動様式を採用していることがわかった。 ・「HIV の知識が知れた」72.0%、「役立つスキルがあった」97.8%、「エイズや STD の予防に役立つ」100.0%、「セイファーセックスを試したい」93.3%
普及の可能性についての調査 ・ロジャーズの「オピニオン・リーダーとフォロワーの分類」を背景に該当人数と方向性の調査を行った	①情報発信意欲＝「友だちに伝えたい」94.5% ②他者との接近可能性＝「イベントを友人に伝えた」69.9%、平均 7.0 人にプログラムについて伝達 普及の方向性はバーの友人 48.1%、インターネットが 22.2%、ハッテンバ等が 29.6%と各方面に及んだ
ワークショップ参加者の採用者カテゴリの分類 ・ロジャーズの「採用者カテゴリモデル」の存在比をもとに、各バーの推定顧客数の内、ワークショップ参加者の占める割合を算出した	調査時点で、プログラム開催店舗 13 軒のうち、普及が拡大していくとされる 16%未満が7件、16%以上が6件（16～20%が3件、20%以上が3件）であった。

【効果指標およびそのための手法に関する研究(研究2)】

1. 効果評価の文献・事例研究

本研究班では、平成13年度にリスク・アセスメント調査の結果に基づく啓発手法の試験開発を開始して以降、プログラムを「評価」する研究もあわせて実施してきた。従来、影響評価、形態評価という名称で行ってきた評価について、Rehle ら (Evaluating Programs for HIV/AIDS Prevention and Care in Developing Countries, 2004) が示した包括的なプログラム評価の枠組みを確認した。(表8)

また、国内で行われている効果評価を実施している HIV 予防介入プログラムの評価手法の比較をする事例研究を行った。その結果、評価デザインにはそれぞれ長所・短所があり、①横断型のコホートでは、統制群と長期の追跡の課題があり、②連続横断研究では、フォローアップ率が明らかでなく、追跡が困難との課題が確認された。

2. 効果評価手法の精緻化と汎用化に向けた研究

研究1で本開発を行った小グループレベルの啓発プログラム「LIFE GUARD」に焦点化し、①プログラムの効果測定の精緻化に向けた改良、②各地の NGO や自治体が採用しやすい評価の汎用化に向けた改良を行った。(表9)

表8 包括的なプログラム評価の枠組み

評価の種類と特徴	該当する本研究班が開発したプログラム
形態評価(Formative Evaluation Research) :概念とデザインの決定 ・誰が介入を必要としているか ・どのように介入は実行されるべきか ・必要とされる介入となっているか	・バー介入 LIFE GUARD(平成15年～) ・STD 情報ページ(平成14年～) ・マンガ活用配布資材アウトリーチ(平成13年～) ・STD 情報ライン(平成11年～)
プロセス評価(Process Evaluation) :インプットとアウトプットの観察 :サービスの質の査定 ・計画された内容はどの程度実現しているか ・提供されたサービスはどの程度満足できるものか	形態評価との混在により類似の評価を行ってきたもの ・バー介入 LIFE GUARD(平成15年～) ・STD 情報ページ(平成14年～) ・STD 情報ライン(平成11年～)
効果評価(Effectiveness Evaluation) :結果と影響の査定 ・どのような結果が観察されたか ・結果は何を意味しているか ・プログラムによって差異が生み出されたか	・バー介入 LIFE GUARD(平成15年～) 類似の評価を行ってきたもの ・STD 情報ページ(平成14年～) ・マンガ活用配布資材アウトリーチ(平成13年～)
コスト—評価分析(Cost-Effectiveness Analysis) :持続性に関わる問題を含む ・プログラムの優先順位は変化されるべきか、拡大されるべきか ・どの程度資源を再配分すべきか	なし

表9 精緻化と汎用化にむけた「LIFE GUARD」評価の改良点

精緻化に向けた改良点	汎用化に向けた改良点
評価指標・質問票項目の変更	フォロー・テスト回答システムの開発
①リスク要因の変容を把握するための設問を追加・整理した	フォロー・テスト回収率上昇の検討
②ゲイ文化に適合したなじみのある文言に変更し回答しやすさと正確さを向上した	①フォロー・テスト調査への協力のしやすさ条件(15 年度調査)の反映
③新たな指標の発見のためのデータ収集として検査経験や携帯率についての問いを試行した	②調査への謝礼の種類を変更

3. 各レベルのプログラム評価

(1)小グループレベル「LIFE GUARD」

介入前、直後、1ヶ月後の質問票調査によって、プログラム評価を実施した。(詳細は分担研究報告書2を参照) 調査は2004年11月20日から最終回2005年2月5日まで実施した、16ヶ所のプログラムに参加した計369名、平均年齢31.2歳を対象に行われた。

まず、ポスト・テストにより、形態およびプロセス評価が行われた。プログラムの満足度は情報量、時間の長さにおいてほぼ80%以上において「適切」であり、「予防に役立つ」、「役に立つテクニックがあった」が90%を越えていた。

また効果評価の結果は、表4 (p.5) の通り、介入前・後・1ヶ月後の比較では、知識、リスク要因いずれの指標でも、介入前よりも介入後の平均値の方が統計的に有意に上昇しているのが確認され、1ヶ月後も持続していた。またリスクのある性行動は、介入前よりも1ヶ月後において、有意に(または傾向)減少していた。

(2)個人レベルのプログラム「STD 情報ライン」「STD 情報ページ」

フリーダイヤル型電話相談を用いた介入「STD 情報ライン」では、①形態評価、②効果評価の方法論の検討を行った。評価は実施記録内容の分析によって行われ、2004年4月から12月の間に相談のあった261件を対象に行われた。指標として居住地、相談時間帯 (20:00～20:30が最多)、相談内容 (複数回答で「治療・検査」52.9%、感染不安「行為」46.7%など)、心配な症状や行為の詳細、相談疾病 (HIV39.8%、梅毒・尖圭コンジローマ13.4%など)、対応方法の評価点、対象者のニーズと提供しているプログラムとの整合性および課題について考察された。

インターネットを活用した「STD 情報ページ」でもまた、①形態評価、②効果評価の方法論の検討を行った。評価はホームページ上で行っている質問票調査の分析によって行われ、2004年4月から12月の間に回答のあった対象者の一部1559名の回答を対象に行われた。指標として、居住地、利用状況、利用動機 (「STDの症状を知りたい」55.2%など)、緊急度、知りたかったSTD (HIV54.8%、梅毒19.0%、B型肝炎15.1%など) が評価された。また、使いやすい85.2%、知識が増えた85.3%、ゲイ向けの情報が役立った79.9%、目的が達成した82.3%と、対象者のニーズと提供しているプログラムの整合性および課題が考察された。

また、このプログラムでは、厳密な効果評価に制限があるため、効果評価の指標と手法について検討し、形態評価をすることを目的に、質問票調査のうち自由記述欄の記述データを対象とした分析を行った。それにより、STD情報ページの効果として、a) 予防啓発ページとしての効果 (予防知識の提供、行動変容の効果、インターネットの特性)、b) ゲイの視点を活かした情報提供、c) 医療機関へのアクセスの要望があることが確認された。

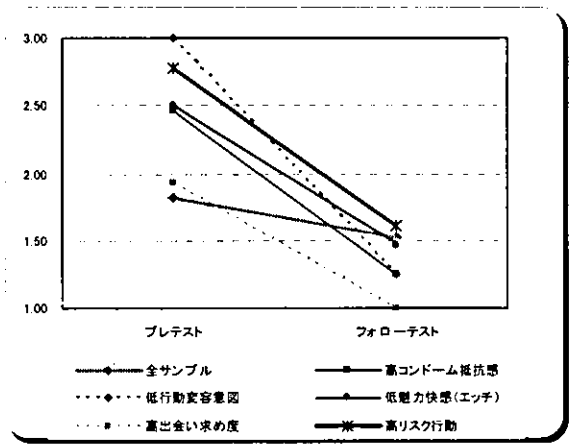
4. 効果評価の検討と活用

本年度は新たな効果評価指標の検討として、①個人レベルでの効果評価手法、②「LIFE GUARD」における特性別効果評価を試行した。

個人レベルの各プログラムは、試験開発からすでに数年を経て、対象者からの認知やニーズが着実に向上してきている。しかし、一方でプログラムとしての評価が、手法の特性上困難であり、限定されてしまうため、介入の効果をはかりにくいという課題がある。本年度は、効果の確認されたプログラム「LIFE GUARD」の本開発(完成)を目指す中で、「STD情報ライン」「STD情報ページ」の認知という条件で、質問票調査 (N=369)を行い、効果を予測する試みをした。その結果、認知の有無による有意な差が複数の項目で確認された。

「LIFE GUARD」における特性別効果評価では、複数の条件別に絞り込んだ抽出サンプルでの効果評価を試行した。プログラムがどのような対象層に特に効果が現れているかを分析することによって、プログラムの実施対象を考察し、プログラムの内容構成にフィードバックするために計画された。介入前、1ヶ月後の変化幅を確認した結果、特に、全サンプルに比べて変化幅の大きい対象層は、①高コンドーム抵抗感層、②低行動変容意図層、③低魅力・快感層 (SSをエッチとは思わない)、④高出会い求め度層、であった。グラフ2において、コンドームなしでアナルセックスされる場合のリスク行動について例示する。

グラフ2 コンドームなしでアナルセックスされる



また、プログラム改良の効果として、前年度と同じ設問について、介入前、介入直後（性行動については１ヶ月後）の介入による変化の幅と比較した。「主張スキル」は、プログラムにおける重点的な取り扱いの結果、オーラルセックスにおいても、アナルセックスにおいても、介入前後での変化の幅が増加した。オーラルセックスでは、介入前の 2.00 が 3.13 へと 1.13 の上昇幅（予備介入では 0.89）、アナルセックスでは、介入前の 2.48 が 3.31 へと 0.83 の上昇幅（予備介入では 0.72）というように変化の幅が増加した。

D. 考察

1. 啓発手法モデルの開発に関する研究（研究1）

(1)ワークショップ型啓発手法の本開発

同性愛者向けのバーでのワークショップ型啓発手法「LIFE GUARD」が、主に昨年の予備介入時に効果の弱かった啓発領域への介入強化を行うなどの改良を加え、本開発された。この本年度の最大の研究成果に伴う到達点として、3つ挙げる。まず、小グループレベルでは啓発要因の分析、介入ポイント、介入手段の提示が可能となった。

２つ目に、研究２の結果もふまえると、特定の介入要素についても意識して啓発可能なプログラムとなったとも言える。つまり、各地域や対象者層などの個別の状況に応じて、重点的に介入する啓発領域を意識し、より効果の出せる手法としての可能性が拡大した。

３つ目として、この手法の個人に向けた教育方法は、対象層に応じて改良可能な、汎用性の高い手法とすることができた。

一方で、効果の確認できるワークショップ型啓発手法は本開発されたが、実施を成立させるための手法については、各地域での新規開拓バーとの関係構築過程を類型化した段階である。従って、次年度以降、拡大実施に関係する要素を検証・分析し、また地域間比較などの分析をしていくことが課題となり、どこの自治体でも展開可能な手法としての完成を目指す。

(2)個人レベル・コミュニティレベルの啓発手法

個人レベルの介入としては、フリーダイヤル型電話相談を用いた介入「STD 情報ライン」とインターネットを活用した介入「STD 情報ページ」の２種類を試験開発・実施した。

インターネットを使った介入においては、同性愛者の視点からカテゴライズされた STD に関する情報提供を、ホームページを使って行うことで、同性愛者がいつでも参照可能な情報提供を行った。またこのプログラムについて、ページを認知している群としていない群に分けて行った質問票調査では、ページ認知群の方が、「行動変容意図」、「主張スキル」で有意な効果が見られ、リスク行動の「コンドームなしでのアナルセックス」では有意に低かった効果が見られた。これらから、リスク行動では一部に介入の効果が伺え、リスク行動に相関の高い「主張スキル」や「行動変容意図」において、有意な効果が現れ始めていると言える。

コミュニティレベルの介入では、イメージや親近感を重視した「情報パンフレット（2 種）」、コンドームをデフォルメしたキャラクターの「セイファーセックス・グッズ」、「HIV と抗体検査サポート冊子」の全4つの啓発資材を開発し、より多くの対象に、長期にわたってリスク行動の変容を働きかける介入を行った。「情報パンフレット」の既読群と未読群の比較による質問票調査では、既読群で「知識」に関して有意な差が認められ、またリスク要因「主張スキル」「自己効力感」リスクのある「性行動」の一部でも、同様に有意な差が確認された。このことから、「情報パンフレット」による介入効果が認められた、と推測される。

それぞれのレベルともに一定の効果が認められた手法であるが、本年度、個人、コミュニティ、さらに小グループを加えた３種のレベルについて、複合的に利用している層が存在していることが判明した。それぞれのレベルの目指している啓発手法についてはその特性において違いがあるが、複合的利用をすることで、そ

れぞれの欠点を補い合う啓発手法として、さらなる効果の見込める啓発手法とすることができると考察している。次年度以降は、複合的な観点での分析を進めていく。

(3)介入の集団およびコミュニティへの普及研究

予防啓発の効果の同性愛者コミュニティへの普及について、ロジャーズのイノベーション普及理論を論理的背景とした、仮説モデルを構築し、その適用の是非について検証した。結果、ワークショップ型啓発の参加者層を、普及において鍵を握るとされる「初期採用者層」として考えることにより、効果の大規模普及につなげる要素を分析することが可能となることがわかった。

今後、小グループレベルの啓発活動の参加者における「個人の採用過程」「集団の普及過程」について、①普及理論の枠組みを当てはめて考えることと、②試作した仮説モデルをもとに同性愛者への予防啓発のあり方、予防行動の普及・波及を規定する要因を明らかにしていく考察が可能となると思われる。

今後は、この仮説モデルをもとに、対象者カテゴリや介入時期にあわせた同性愛者コミュニティへの予防行動の普及速度・普及手法を提案していくことが課題である。

2. 効果指標およびそのための手法に関する研究(研究2)

(1)効果評価の文献・事例研究

文献・事例研究によって、HIV啓発手法について、包括的なプログラム評価の枠組みとその評価の種類を確認した。プログラムの開発および事業的な普及に向けては、形態評価、プロセス評価、効果評価、コスト－評価分析がほぼ時系列的に必要とされていることが整理され、明らかになった。また、国内の事例研究において、①形態評価や一部効果評価に限られること、②包括的な効果評価を実施する事例はないこと、③効果評価には介入を行わない統制群を設定する困難さや、追跡調査の実施困難といった課題があること、が確認された。

今後は、プロセス評価という新たな評価方法を検討することが課題としてあげられる。

(2)効果評価手法の精緻化と汎用性に向けた研究

研究1で本開発されたワークショップ型啓発手法「LIFE GUARD」に焦点化し、効果評価の精緻化を目的として、①効果評価指標の見直し、②同性愛者等が回答しやすい文言の整備を行った。汎用化を目的として、①介入の追跡調査のためのフォロー・テストの回答システムを構築し、②フォロー・テストの回収率上昇のための検討を行った。

精緻化では、運用上は人為的な誤操作を排除することに成功したと言えるが、項目改良の成果については、調査協力者に対する調査結果の分析が待たれる。フォーカス・グループ・インタビュー調査により、質問票の項目・表現の妥当性が検証され、質問票調査の信頼性の向上をはたすことが課題となっている。

汎用化では、システムとして方法論を普及する準備が整ったと言える。今後は、本年度明らかになった問題点を修正し、包括的な評価計画のもとに実用のための項目整理を行っていくことが課題となる。また、回収率上昇のための検討では、これまでに蓄積されたフォロー・テストへの協力状況のデータとの比較解析する中で、その成果について明らかにしていくことが課題である。

(3)各レベル別のプログラム評価

①小グループレベル「LIFE GUARD」

形態評価およびプロセス評価と効果評価が行われた。形態評価によって、プログラムの完成前における対象者のニーズや満足度と合致したプログラムを開発できたということが確認された。また、効果評価の結果、本プログラムの介入により、介入直後の知識、リスク要因に有意な効果がもたらされていることが確認され、さらにその介入効果は1ヶ月後も持続し、性行動にも有意な効果（一部傾向）が確認されたことが明らかになった。本レベルの効果評価の指標や手法はほぼ完成と考えられる。

今後は、介入実践にも関わらず、著しく介入効果として現れにくい項目については、プログラム介入の課題なのか、効果評価の指標設定の課題であるのかを分析するなど、効果評価手法としての完成と、類似するプログラムへの汎用化を目指したい。

②個人レベル

個人レベルでは、その啓発手法の特殊性から、介入前後の効果評価を行うことは難しくなっている。「STD情報ライン」と「STD情報ページ」について、形態評価が行われた。それにより、プログラムの対象層の特徴およびニーズ、プログラムの満足度が測定され、いずれも概ねプログラムの満足度は高く、ニーズに対応した介入がなされていることが確認された、と言える。

また、ホームページ上での質問票調査によっ

て、形態評価のデータを蓄積してきた「STD情報ページ」では、自由記述の回答内容を詳細に分類、分析することによって、このプログラムの効果や意義が改めて確認された。これらを分析する中で、効果評価の指標を発見していくことが今後の課題となる。また、分析結果をフィードバックすることによって、より介入効果のあがるプログラムの開発に活かすことができると考えられ、その点からプロセス評価への挑戦が求められている。

③コミュニティレベル

マンガとビジュアルを活用した配布資材について、形態評価のための記録化と効果評価が行われた。効果評価では、本プログラムを利用した人の方が未利用者よりも、一部の「知識」、一部の「リスク要因」、「性行動」のアナルセックスにおいて有意に高いことが確認され、本プログラムの効果が仮定された。本プログラムの場合、対象層の規模、運用上の現実性から、こうした評価手法に止まらざるを得ないと考えられる。そのため、①手法に関するさらなる研究、②プロセス評価の実施、③プログラム単体の介入効果ではなく、複合的な介入効果の評価手法の開発、検討が課題となる。

(4)効果評価の検討と活用

前述のように効果評価の困難な啓発手法もあるため、新たな効果評価・指標の検討として、①個人レベルでの効果評価手法、②「LIFE GUARD」における特性別効果評価を試行した。

個人レベルの効果評価としては、プログラムの認知・未認知によって、知識、リスク要因、性行動の指標について比較、検討を行った。認知という限定的な枠組みでの評価であるため、参考値に止まるが、「STD 情報ページ」では一定の効果があったと仮定される。今後は、こうした結果を導くに至るプロセス評価を行うことによって、結果に対する説明をもつ、より精緻な評価を検討していくことが課題となる。

「LIFE GUARD」における７つの特性別効果評価の試行では、抽出した特性の全てにおいて、全サンプルでの介入前後の平均の差（変化幅）よりも大きい変化幅を確認した。厳密な差を分析する手法ではないが、抽出した特性は、本プログラムがより介入効果をもたらしやすい対象層である、という仮説が導かれた。このように効果評価を活用したプログラム評価は、対象に適応したより効果のある啓発介入を考える上で、有効であると考える。今後、この評価方法が特性間の比較を行っていないことなどの課題、そのほかの効果評価の活用について検討をしていきたい。

3. 達成度と今後の研究計画

本年度は、バー介入ワークショップ型啓発手法の本開発に成功し、介入の普及を視野に入れた啓発概念を検討し始めるなど、啓発手法モデルを開発するうえで大きな展開を果たした。

研究計画の最終年度にあたる3年目は、ワークショップ型啓発手法を全国8地方ブロックに拡大実施し、その実践を通じて、各地に同性間施策を普及するための NGO-行政連携に有用な資料を作成し、「介入効果の集団・コミュニティへの普及」モデルについてさらに検証を行う。

E. 結論

本年度は、①効果のあがる啓発手法を開発すること、特にワークショップ型啓発手法を完成させること、②啓発介入効果が介入対象の個人から集団、社会へと拡大していく普及・波及について検討すること、③効果があるかどうかを判断するための効果評価手法の精緻化・汎用化を目指すこと、を目的として研究を行った。

その結果、本年度は以下の6つの成果を得た。

① 同性愛者向けのバーでのワークショップ型啓発手法が、15 年度の予備介入の課題などをふまえて改良し、本開発された

② ワークショップ型啓発手法は、効果評価の指標を見直した手法により、介入前後での介入効果があること、1ヶ月後まで効果が持続していることが評価、確認され、プログラムとしての本開発と位置づけられた

③ 啓発介入の考え方として、従来の単体の手法に完結する啓発介入を活用して、さらに個人への介入が集団、コミュニティへと普及・波及していく新たな枠組み（介入の集団およびコミュニティへの普及モデル）を検証し始めることができた

④ 国内外の文献・事例研究により、啓発介入プログラムについて、包括的なプログラム評価の枠組みを踏まえ、啓発介入プログラムに対照した効果評価手法の整理と課題が確認されたこと

⑤ 効果評価の精緻化に向けた指標の見直しと、汎用化に向け1ヶ月後追跡調査の回答

システムが構築されたこと

⑥ 3レベルでの HIV 予防啓発手法が実施され、効果評価の難しい個人レベル、コミュニティレベルにおいても、効果評価に向けた挑戦を開始したこと

今後の研究課題として、以下のものがある。

① ワークショップ型啓発手法は、新規開拓のバーとの関係構築以外にも、全国各地で実施するための要素について分析し、どこの自治体でも展開可能な手法として完成させること
② 「介入の集団およびコミュニティへの普及モデル」に関して、介入の対象層や時期などによる普及実態、普及方法について検討していくこと
③ プログラムの介入効果が個人から集団、コミュニティへと普及する、その普及効果を評価する手法について検討すること
④ 小グループ、コミュニティレベルの啓発手法では、各啓発手法のプログラム評価と改良に取り組むこと
⑤ 単体での手法に完結せず、各レベル・各プログラムの複合的な啓発とその効果評価に着手していくこと

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

風間　孝.「エイズとホモフォビア」.成蹊大学文学部学会編. 成蹊大学人文叢書３「病と文化」p.179－p.201. 風間書房. 2005 年.

2. 学会発表

Masao KASHIWAZAKI, Tomoo SUGAWARA, Takashi KAZAMA, Kazuya KAWAGUCHI, Noriko MIYAUCHI, Hirokazu KIMURA "Safer sex workshop for MSM in Japan: Adopting results of risk assessment and using educational cartoon materials" The 15th International AIDS Conference 2004. Bangkok.

Hiromi HATOGAI, Hiroshi NIIMI, Takashi KAZAMA, Masao KASHIWAZAKI "Research on barriers to accessibility to medical/health services among MSM/gay men in Japan" The 15th International AIDS Conference 2004. Bangkok.

Takashi KAZAMA, Masao KASHIWAZAKI, Toshihiro OISHI, Tomoo SUGAWARA, Hiroshi NIIMI, Kazuya KAWAGUCHI, Noriko MIYAUCHI, Hirokazu KIMURA "Evaluation of 12-small group interventions for HIV risk reduction among gay/bisexual men in 3 cities in Japan" The 15th International AIDS Conference 2004. Bangkok.

柏崎正雄、大石敏寛、鳩貝啓美、新美広、太田昌二、嶋田憲司、河口和也. ゲイバーを介入空間とするワークショップ型 HIV 予防啓発手法のケーススタディ～各地で実施可能にするためのモデル～. 日本エイズ学会口演発表、2004 年. 静岡.

鳩貝啓美、柏崎正雄、大石敏寛、新美広、太田昌二、菅原智雄、風間孝. 同性愛者等を対象とした個別施策層と行政-NGO 連携を推進するうえでの課題/阻害要因に関する研究. 日本エイズ学会、2004 年. 静岡.

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

Ⅱ．分担研究報告書

研究１：啓発手法モデルの開発に関する研究

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）
分担研究報告書
研究1　啓発手法モデルの開発に関する研究

分担研究者：大石　敏寛（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）
研究協力者：太田　昌二（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）
柏崎　正雄（財団法人　エイズ予防財団）
河口　和也（広島修道大学　人文学部　教授）
嶋田　憲司（せかんどかみんぐあうと）
新美　　広（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）
鳩貝　啓美（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）
藤部　荒術（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）
宮近　敬三（特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会）

研究要旨

本研究では、複数の有効な啓発手法の開発を通じて、全国各地に同性間の予防啓発を実施し、普及させていくことを目的としている。

本年度は、同性間の予防啓発手法の実践を「個人レベル」「小グループレベル」「コミュニティレベル」という３類型に基づいて実践し、啓発手法としての確立をそれぞれ目指した。

「個人レベル」「コミュニティレベル」においては、啓発の対象者層に対して、リスク・アセスメント調査に基づいた取り組みを行った。「小グループレベル」においては、ワークショップ型啓発手法「LIFE GUARD」について、15年度の予備介入をもとに、重点的介入をすべきリスク要因をターゲット化した改良を行った。その結果、介入効果があることが確認され、かつ重点的・優先的に介入の必要なリスク要因について設定のできる啓発手法を完成させた。

また、以上のように開発、検討されたプログラムを各地に普及するという目標から、これまでの地域別のプログラム実践事例について、地域間比較の実施、同性愛者等に対する個別施策層についての自治体向けの質問票調査のデータを再構成し、本研究班が実践している行政との連携事例の分類および考察を行った。

さらに、予防啓発手法の介入効果を、同性愛者の集団に大規模に広めていくための方法を検討していくために、同性愛者間の予防行動の普及・波及効果についてのモデルを試作した。このモデルは、効果について測定可能な「小グループレベル」の介入手法の完成を一つの起点として考案されたものであり、介入効果が個人から集団に伝播していく要素について明らかにしていくことが可能となりうる枠組みである。このモデルをもとにすることで、同性愛者コミュニティにおける新たな予防行動の伝播方向を考えることが出来る。そのため、本年度は、ロジャーズの「イノベーション普及理論」を理論的背景とし、普及理論の「個人の予防行動採用プロセス」「普及の集団過程モデル」を構成する各要素についての適用を試行した。